

空



2009年

SORA 28号

吾亦紅 (28) | 2

柴田 佐知子

金印の島に筋なす秋の風

秋高し漁師は勁き顔に老い

豪傑の匂ひたつなり菊人形

太刀魚は長しどこからでも切れと

鳥威すずめ遊ばせぬるやうな

赤牛が阿蘇の花野を押さへたる

露草や外輪山は鳥放ち

考へてゐる鶏頭の引き抜かる

フォルティッシモ

荒井千佐代

差す潮のさざ波となる合歡の花

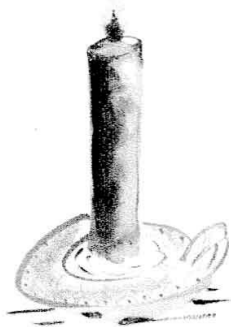
祈りつつ大蟻踏みつるルドまで

炎天や象形文字の鳥けもの

涼しかりけりフォルティッシモで弾き了へて

錆厚き陸の錨や夏の蝶

野牡丹や気休めほどの木戸の鍵



金魚買ふ仰向きの死を想ひつつ

海風が雨つれてくる緋のカンナ

さまざまな骨の散らばる秋渚

銀漢やたんすの奥の負ひ紐

濁声の昼の鷄鳴ほうせんくわ

自画像に赤を塗り足す葉月潮

二人ゐて一人遊びや赤のまま

盆過ぎの被さつて来し裏の山

病人の爪ばかり伸ぶ秋日和

〈秋惜しむ辻井のシヨパン聴きながら

小林浩次〉この秋、わが家族が最も感動を受けた出来事、それは辻井伸行氏の生演奏を聴いたこと。響きやすい小さめの会場であったが、ピアノ一台の音がまるでオーケストラのように深く、豊かで、そして力強かった。その折のベートーヴェンも勿論だが、今、毎日のように聴いているラフマニノフのピアノ協奏曲第二番の一楽章などは、それはそれは伸びやかに謳い、彼独特の世界を繰り広げる。「食べ物美味しい長崎に来年も来ます」と、演奏会の最後に嬉しい言葉を残して下さったが、是非そうして頂きたい。今度はコンチエルトでも。

間もなく立冬。退職して七か月が過ぎたが、私に進歩はあったか…否。教会暦では待降節も間近。クリスマスまで省内を求められる。苦しいと思いつながら、毎土曜ミサオルガンの席に座る。神様助けて助けてと叫びながら。

水汲む 服部 早苗

水汲めり十月の雲掬ふごと

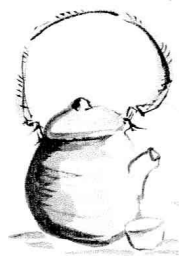
生真面目な蝗の貌の葉をすべる

風船葛種入る影の濃かりけり

米櫃の中が熱しよ台風裡

曼珠沙華卅ともゑの根を抜けて

山門の修理日和や金木犀



山手線西日暮里駅を降りて、線路脇の急坂を登る。一方通行のこの道は人ひとりやっと通れるガードレールのついた道。右手を見上げれば切り立った崖。春には桜の花片がはらはらと散る。秋には伸びた蔓に葛の花が揺れる。左手を見れば、今降りた駅のホームに入る電車を眼下にできる。坂を登りきるとそこは、道灌山公園入口。若い頃の子規と虚子がそこに咲いていた夕顔をめぐり、熱き論を戦わした所と思えば、何故か特別な場所に思えてくる。今は整備されて公園になっており、生垣の下に野良

紙敷いてそこが食卓うすもみぢ

月の出は正午過ぎかな飲食す

鴨よぎる影のあとより声のして

多宝塔朱色の垂木柚子は黄に

秋さうび雲はうしろにめぐりけり

多羅葉の落葉に書き留めし文字

柿紅葉無傷といふは気のひける

字余りのごとく数珠玉手の中に

鳥渡る空師は空を整へて

猫たちがのんびり昼寝している。先に進むと右手は小学校の校門。校舎は地形的に下の方に建っているらしい。子供たちの出入りはないが、植わっている季節の花が楽しい。左手は諏訪神社の森。夏のこの森はひと際涼しい。下の線路から吹き上がってくる風が木々に濾過されるからだろう。森の向かい側は太平洋美術研究所。高村光太郎の妻智恵子が絵を学んだ所。今も智恵子のデッサンによる裸婦像が展示されていて、通りがけの目を楽ませてくれる。そして諏訪神社の森を抜ければ雪見寺といわれた浄光寺。私の墓参の寺。徳川の將軍が雪見をしたという。確かにここに立てば、雪景色の東側一帯は眼下に美しく見えたことだろう。子規終焉の地、根岸の子規庵もあるいは見えたかもしれない。

お墓参りが済めば、あとは義父が好きだったうずらの煮豆とちよつと高い鰻の佃煮を買って、日暮里駅へ。下町らしい長屋の佇まいも残っているこの道は、四十年通っている私のなつかしい道でもある。

案山子

あさなが捷

秋の雷耳を大きく涅槃像

ゐのこづち付けて疲れて戻りけり

宣誓を反復練習秋の雲

目をみはる案山子は夜も同じ顔

草紅葉しあはせにするとつたのに

ハロウィンや子供は疲れ知らざりし

みあれ祭霧の底より船湧きて

裏側に近道のある葱畑

雪のせて雪の大樹のそびえをり

初夢の佳き結末であつたやうな

一年以上たつた今も“？”な話です。

信号待ちをしていたら、コツンと当たった感触。追突されたと思い、すぐ車を降りました。五十才位の男の人がいきなり「(ギヤを)。パーキングに入れてなかつたでしょ、車下がつてきた」と一気に言うのです。私が混乱している間に「だからクラクションを鳴らした」などと、私におばちゃんと言三回も呼びかけながら、続けるのです。

私は急いでいたことと、お互い塗料が少し着いただけだったこともあり、釈然としない気持ちながらも「それはどうも済みませんでした」と言つて、その場を離れました。でも、後から考えると悔しくて、その場所を通るたび傾斜はないよねと思うのです。

果たして、あの人は大らかで気の良にお方だったのか、それともすぐく悪賢いおっちゃんだったのか。もし後者なら、あの何秒かの間にあれだけのことを思いつくものだろうか、いくら考えても不思議でなりません。

唐津

小林 朱夏

おくんちの鯛も兜も浜へ曳く
柿熟れて土塀の中は静かなり
芋洗ふ子芋親芋より離し
木の実落つ独りぼつちの滑り台
露おりし庭ふくらんでゐたりけり
新藁を持ち寄り習ふ注連飾
親は酔ひ子は飽きてをり里神楽
霜の朝背骨尖らせ犬唸る
三十三間堂足凍るまで巡りけり
翔つ鳥の忙しき音や寒の入り

・花・

花は、来る年来る年、新鮮に咲き続けている。

私はそれを追ひ掛けながら描いてみる
が、花のやうに毎年新鮮には描けない。

香月 泰男 絵と文

春 夏 秋 冬 (新潮社版)

「空」は今回で28号となり、平成二十二年から八年目に入る。私にチャレンジは難儀であるが、チャレンジは常に心掛けたいと思っている。



青木の実 苑 実 耶

しぼりたての乳の温もり秋高し
草の実や抜け道犬が先導す
匂に生を遺して裂けし山椒の実
ふるさとの夕べ刈田の匂ひかな
朝市の台を占めたる柿の箱
糶田にさぎの降り継ぐ夕べかな
繰り言を初めてのごと聞く良夜
木犀の匂ひ北より南より
最期まで母は惚けず青木の実
下手より羊出てくる聖夜劇

・冬至南瓜・

「妙なことを言つて来よりますばつてん」
隣のおばあちゃんが我が家に来る時の極
り文句。縁側に腰かけてお茶を飲みなが
ら、家族への思い、昔話、近所のことな
ど、とりとめのない話をする。

ある時「今日は冬至ですけん」と、南
瓜のひとつを差し出された。冬には南
瓜が手にはいりにくい時代のこと。大切
に保存してあったものだろう。その一部
を我が家に分けてくださった。正月、盆、
彼岸以外はあまり頓着しないのを知つて
か知らずか、冬至南瓜のひとつを話
すと「妙なことばっかり言うてきてすん
まっせん」と帰って行かれた。

実家に日あたりのいい縁側があった頃
の話。



稲の秋

高倉恵美子

形代の束を忘れて禰宜帰る
 祭獅子鳥居廻りてよろけをり
 部屋の窓叩き友来る敬老日
 声だけは元気と言はれ秋高し
 石段の高き社や秋祭
 葡萄狩覗く袋の白さかな
 言ひ訳の上手な子供秋早
 大南瓜ばかりごろごろ居座りぬ
 収穫祭鎌と包丁並べ売る
 地下足袋をしばらく履かず稲の秋

・彼岸花・

うきは市浮羽町のつづら柵田の彼岸花見物は通行止めまで出る人出だというので諦めていたが、病院で親しくなった方が「うちの村に綺麗なところがあるけん来て見る？」と言われ、早速連れて行ってもらった。

堤防の両側に真っ赤な彼岸花が並んでいた。豊かな水の面に照らされて美しい。老人会の人たちが草を刈り、球根を増やしここまで育てるのに十年かかったという。「綺麗だと言ってくれる人がいるのが嬉しい」とのこと。

帰宅して家の近くを廻ってみた。彼岸花がいつも咲いていた墓にはあまり無かったが、久し振りに行った減反田の畦にびっしりと咲いていた。彼岸花は球根で増えるというけれど、去年咲いても今年は咲かなかつたり、急に別のところに咲いたりと思議な花だ。

